

4) ナズナ=薺

ナズナはアブラナ科の二年草である。通称はぺんぺん草で、ナズナというよりもこの方が話が早い。日本全国の路傍や原野、庭先にごく普通に見られる。葉は羽状に深裂し根際に密生する。茎は高さ 30cm ほどになり茎頂に**総状花序**を出して、白い小さな 4 弁花を密集して開く。果実は偏平で三味線の撥のような逆三角形をしており、これがぺんぺん草といわれる由縁で、春の七草の一つとなっている。和名の由来は「愛でる菜」であり「撫で菜」が訛ったものとも、夏を過ぎると枯れてしまうところから、「夏無」が濁ったものともいわれている。一方、朝鮮古語では [nazi] と呼ばれており、これに菜が付いたものとする説もある。別称もいろいろとあり、ぺんぺん草の他に三味線草、スズメダラコ、オトコナ、ネコノピンピン、カンカングサなどと呼ぶ地方もある。学名は『*Capsella bursa-pastoris*』で、属名はギリシャ語で箱を意味し、カプセルの語源でもあり、これは蒴果の形状に由来するものである。種小辞は羊飼いの財布という意味で、このためイギリスでは『shepherd's purse』と呼ばれている。

ナズナの薬用としての歴史は古く、全草を煎じて利尿、解熱、子宮、腸、肺の止血などにも用い、中国では 6 世紀の『**齊民要術**』にも記述がある。また民間療法では、根や種子を煎じたものを目の痛みや洗眼などに用いていた。若菜を摘んで湯搔いて、お浸しや和え物、油炒めなどにして食べる。細かく刻んで飯に混ぜて炊き込むと香りがよく、旧暦の正月 6 日には七草粥として食べる風習があった。平安時代に源順によって編集された『**倭名類聚鈔**』(ワミョウルイジュショウ)には、「和名、奈都那」と記され、『**新撰字鏡**』(シンセンジキョウ)には「薺 奈豆奈 又支波井」とあり、当時から蒸したり、煮たりして食用にされていたことが記されている。春の七草の習慣は、平安時代の後期から始まったものと考えられ、ごく一般的になったのは江戸時代になってからのことである。また 10 世紀前半の延喜式には、ナズナが宮中に献納されたことが記されている。しかし『古事記』や『万葉集』にはナズナの記述はなく、和歌の題材として詠まれることもなかった。『枕草子』では 63 段の「草は」には

ことなし草は思ふことをなすにやとおもふもをかし。忍ぶ草いと哀れ也。

道芝いとをかし。茅花もをかし。蓬いみじうをかし。山すげ。日かげ。山藍。

浜木綿。葛。笹。青つづら。なづな。なへ。浅茅、いとをかし。

というようにヨモギやナズナについて触れている。しかし春の七草が宮中などで、取り上げられるようになったのは、11 世紀の平安時代後期からのことで、源俊頼の自選歌集『散木奇歌集』(サンボクキカシュウ)の中には、以下のような歌が残されている。

君がため夜ごしに摘める七草の 薺の花を見て忍びませ

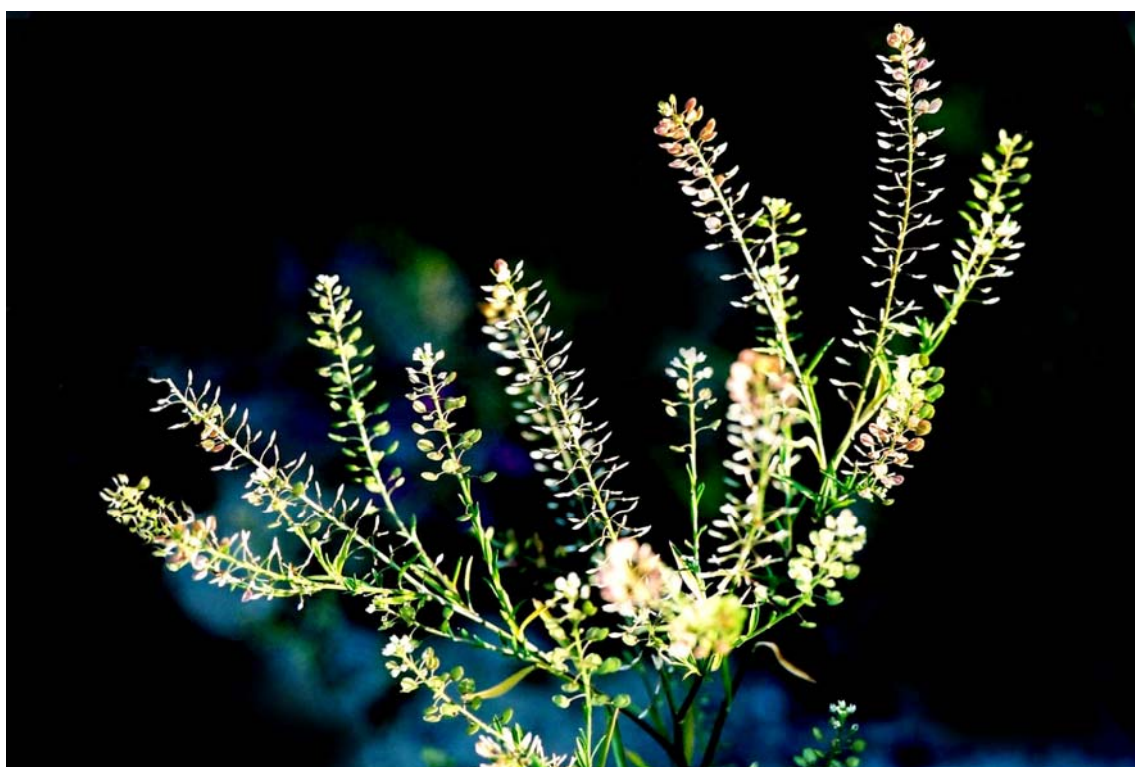
「秋の七草」がすでに平安時代には確立され、『万葉集』にも詠まれているのに対して、「春の七草」の成立は意外と遅かったようで、宮中以外でも行なわれるようになったのは、鎌倉時代になってからのことと思われる。



ナズナは野山で、真っ先に春の訪れを教えてくれる花の一つである(さいたま市緑区)。



ナズナの花というと？になりそうだが、あのペンペン草である。種子の形が三味線の撥に似ているために名付けられたものである(さいたま市浦和区)。



昔懐かしいペンペン草。もう撥がたくさん出来ている(岐阜県高山市新穂高温泉)。



モモの木のしもナズナの洪水、黄色はタンポポ、紫はホトケノザである(山梨県甲州市)。 [目次に戻る](#)